

職員オススメ本 1 月



「人魚が逃げた」 青山 美智子／著 P H P 研究所

ある週末、SNS上で『人魚が逃げた』という言葉がトレンド入りする。『王子』と名乗る謎の青年が街をさまよい歩き、「僕の人魚がいなくなってしまって…逃げたんだ、この場所に」と語る。不可解な彼の言動に、人々は興味を持ち始める。そして人魚騒動と同じ時、『王子』と少なからず関わりを持った5人の男女も「人生の節目」を迎えようとしていた。

銀座を舞台に、アンデルセンの人魚姫の話をモチーフにした、心温まる5つの連作短編集。



「日比野豆腐店」 小野寺 史宜／著 徳間書店

東京の町なかにある親子三代にわたってこじんまりと営む「日比野豆腐店」。ある日、三代目の店主、清道がコロナに感染してしまい……。

手を取り合って豆腐店を切り盛りする親子とその飼い猫の家族の物語です。



「裁判員 17 人の声～ある日突然『人を裁け』と言われたら？」
牧野 茂、大城 聡、裁判員経験者ネットワーク／編著 旬報社

2009 年 5 月から始まった裁判員制度。これまでに 12 万人以上の方が裁判員もしくは補充裁判員として実際の刑事裁判に参加されています。

この本では制度導入から 15 年の間、刑事裁判に立ち会った裁判員 17 名の方々がインタビュー形式で、実際に立ち会った事件の内容や裁判官との評議の様子、目に見えない守秘義務の重みや心の負担とともに、ほぼ全ての方が裁判員としての経験を前向きに捉えていることなどが語られています。

裁判員候補者となった方には毎年 11 月頃にその旨が通知されるそうです。いつか自分にも声がかかるかもしれない。身のまわりのできごとを他人事と思わず「自分ごと」として捉えることの大切さを、この本は教えてくれます。

非日常的な裁判員体験のリアルに是非触れてみてください。